



俳諧一葉集

伊地知文庫  
355  
1

伊地知文庫  
文庫20  
355  
1





文庫20  
355

芭蕉翁卷句附合久事茶話俳句遺法消  
息也一代之風藻雖不可忘平茲所謂親覩  
於右書收藏於池庫者悉以舉焉

# 俳諧一葉集

前後篇九冊

東都中橋北植甲

一具菴藏梓



伊地知氏書冊



俳諧者死常色而中格妙門也  
世人妄謂一時戲言綺語也豈  
夫然耶蓋能致知而達理之常  
變氣之順逆固守自得遊心於  
太虛則語默作之無有不善故



棄名利而造之靜安可獲焉誠  
意而為之身脩家整舉不外乎  
此矣昔從芭蕉啟正風雲從風  
靡今雖其流間有渚者泝源者  
亦不少也屬者社友集錄翁一  
期所嘯以為小冊以便卷懷可

謂夜行珠矣傳曰法不自顯弘  
之在人湖子其人乎是為序  
文政十亥歲四月

仙波僧正書于蒼苔菊

林中之谷神齋 同藺







歌子も、おふ杜村山家集の稿をあたえて、貞  
享の初年付、めし狂句千、絶外の洒首を、散一人  
情を、未句千、草一、又、新成記、能千、そ、ま、こ、歌千  
道、の、神、と、め、ふ、れ、ま、ふ、其、法、生、ま、う、回、海、に、あ、ふ、經  
る、丈、と、ま、を、御、を、知、棕、郎、と、柳、書、と、梅、子、門、中  
子、國、に、千、ら、ち、(一、千、風、を、唱、ふ、人、幾、千、こ、い、ふ  
數、を、し、し、る、其、志、の、れ、く、一、度、を、看、こ、胃、を、あ、ら、ひ  
大、言、千、通、し、く、ま、お、原、の、ふ、り、予、斗、第、の、量、殊  
千、ま、去、千、生、れ、師、友、千、く、く、以、り、終、の、ゆ、と、れ

少、い、ひ、の、古、学、院、で、は、う、て、祖、翁、の、一、毒、千、ら、ち  
ま、ま、千、は、物、を、唱、者、千、と、ま、千、ま、千、く、ま、千、  
を、受、く、や、と、散、り、う、く、消、息、迷、漢、の、志、け、き、ま、ま、お、し  
功、に、集、め、し、其、ひ、ん、の、世、の、一、と、し、千、ふ、ら、ひ、を、俳、諧、一  
葉、集、と、題、し、初、に、九、卷、と、ま、千、さ、れ、と、か、ね、訂、一  
古、巻、千、西、中、千、非、め、り、是、ま、ま、と、む、千、く、村、肝、を、ま、ま、こ  
み、の、功、也、舎、を、道、旁、千、つ、と、れ、三、年、ま、ま、あ、ふ、り、  
い、ふ、話、千、ひ、と、ま、千、友、人、坎、嘗、の、函、底、を、ま、ま、あ、ふ、り、  
金、ふ、り、成、え、く、あ、ら、ね、の、海、千、は、ふ、て、大、事、千、此



を費さんよふまゝに此仙境に入るとおぼや  
うに此人の心法を授けいふふやうに  
画き水やちやとて其の巧拙を審ひ一生を名利  
あやかしそふけぬる例法を勉て未だ例法を  
くまふれさし世のちや俳諧をいふとそそふ弱  
乃何をもうしてわが世の燈らふ志す

又取丁亥仲秋

四解書湖中

凡例

- 一 数々の部寛文延寶天和時代の分は四季ともて  
帖の付のり玉貞享元福の分は表付のりともて  
手紙のりともて 叙言季の分は巻末に出す
- 一 同類 書きを足らるる句或は行脚の法或は俳友  
子傳へる古書に所又ふふ分私に授けよるる  
阿れは考證として季の末に載す
- 一 附合の部は延寶元元禄元年歴として  
次等と記翁一季の流りとして志す







俳諧一葉集 後句春々部

古学庵佛号 編  
幻窓 湖中  
坎窩 久藏 校

寛文延享天和年中

庭訓の性未修久庵より此の巻  
昔白多字甚る哉 枕草子の巻  
今年を棚へゆけてや若くは  
年や人年とてわけてはるる来  
園原の巻もあやふらひの巻  
かひもんとつくはるる来





もつ来つる是る年玉らるる玉  
柳春に大哉春と云

えの感あり

餅を言ひし折法昌宗の字枕

季吟勅進を詠

和歌の法とよやわりの八重子よ  
此梅子生きた初言と唱り包し  
古以の梅や新波の二年 哉  
梅うわさらしおらふ不系太郎  
志保一里は尻とすけぬ春の駒  
梅 柳 さきき若前うれ女うき

杉風言書

さしけらるる二月中旬より梅子  
去年はとやそくすき行よ次郎月  
初この妻へついの崩れよかよひ  
暮らすとく白魚やとく六浦ぬる  
石川加解生の今中本店子家流れ  
厨へんとして芥の飯やをて津川ま  
持来ふこれ青泥坊底の芥や砂ふ  
千代の快とてやうおむ  
家もあいの朝喃跡す芥の食  
此まんや墨子芥枝をてて  
さうあつ梅子すけ引風も  
梅吹や向の換木の上ふあり



竹内一枝軒

春より自一梅花一枝のこころささる  
ゆらき風や面くさくさく木 枝 葉  
餅やをこころささるやあふれ  
ふふんん菩提の縁を前々これ  
去る魚子價りこころささるみあれ  
菅指く貧乏の女操りよす家  
内裡能人形天皇の御宇とくや  
右所八体の内ニ  
貝よまゝ風の子ささるや和音の浦  
映るるゆりやうらささるすけ  
播けんやまを木枯の枝もこころ

山吹のちの葉のさめからら魚あふや

夏方知酒酔を始覺殊神

花よりよせ糸海走らく食さる

雨降るれハ

草履の底おしゆらむ山休る  
糸の糸よりけりこころささる月  
節を思ふ月も足る鬼 薊  
くら山やお探りこころささる  
若のえりこころささる 梅海苔  
紅毛と花より来りこころささる  
姥横吹やむねのおもひか  
糸ささるこころささる足もつれ







山家遠志

後堀り了冒余千 餅ねお丑のし  
伊勢うらまふ家も 木くうち代のみ  
嵐香り亭なる 西月小袖をさるれば  
後やうり安千 似たりと都のたま  
ちの節波をい ちんを旧友のまうて  
酒興しうらま えりの屋をとし跡ゆけ  
おの尺をうら べ  
二り千とぬうら へきしれ記の素  
あふふあふの ぼくつてんれいの佛おの  
うらうらふをさ へとね  
戯るうらま へらふまはたかか  
か

あふらうらふ ありきととらう

こもれえしあれ 人いあふあ  
あふのあふあ 危うきとむらお  
あふのあふあ 危うきとむらお  
あふのあふあ 危うきとむらお

大伴結の字の けいあ何 佛  
人と尺ぬきや 鏡のうらめ  
手しや猿子 是をさるるさるの  
えうらえ 田あふのうらめ  
遠き千とあ 何あふのあ  
あふに あくゆらむ 友もあ  
古柳千とあ 揺ゆくさるる  
一とあふあ 一度つらうさるる



菊菊千々女々々うのわの葉々

風姿亭

去るにこそつるぬら此野山これ  
大夕枝やー此字を引てーこまみ  
ま多れや名とまふ山の影雲  
西月とみ地と近江や関月  
うくひのひのまきーなる枯うま  
おふ方ー

去るにこそつるぬら此野山これ  
大夕枝やー此字を引てーこまみ  
ま多れや名とまふ山の影雲  
西月とみ地と近江や関月  
うくひのひのまきーなる枯うま  
おふ方ー  
ある人の字の戸と書付けらるる

おふ方ー  
去るにこそつるぬら此野山これ  
大夕枝やー此字を引てーこまみ  
ま多れや名とまふ山の影雲  
西月とみ地と近江や関月  
うくひのひのまきーなる枯うま  
おふ方ー  
ある人の字の戸と書付けらるる

おふ方ー  
去るにこそつるぬら此野山これ  
大夕枝やー此字を引てーこまみ  
ま多れや名とまふ山の影雲  
西月とみ地と近江や関月  
うくひのひのまきーなる枯うま  
おふ方ー  
ある人の字の戸と書付けらるる



红梅や尺女をえつゝ玉のしほ  
梅おろし梅子をかきふ枝の南  
山里に万葉をよみ梅のさか  
をよみよし

阿古久さらの心とらへし  
卓袋亭月待

月やたらや梅のけけゆゑ小山伏  
山家

手滑うむきさく梅おけけりうけ  
侍奴の山家よきやふ物ある去る  
よしけりやし葉とさ石とやゆふに  
本やとあるは思ふにありあき

よあけしものまひを梨野也これ考  
て日本料の石炭とて物とていふや  
侍さけけりうのみ枝ありしをんけ  
めつゝ

あやうむつゝあほつゝ言はれ梅のふ  
一とをあのちり梅ねきこる花  
けしけり梅の侍や知人子あり侍は  
けしけりみらのたかく尺子ゆくとて香  
をよみよし

又もとく梅の中へ梅のさか  
侍なれし

おもしろ子おもしろ梅のさか



細代民終身多し  
梅の本手多しやう本知梅の世  
里のふよ梅お強を牛乃 観

園女亭

暖簾のたぐもゆり 少少梅

乙州と東武行儀

梅もこの冬末すこのたのめさう汁  
まもやうきのきとこのふれ梅  
かきくすお力なまきく梅板  
吉末の海く老人のふいふ  
高弱のきみはさし梅のふ  
仙某新八さまの二月おすく

一個名のゆり父梅九子方ヤフ  
うーん

梅のふりやうは一字あを梅はし  
くめうのゆりのもさうは梅の  
なまきく梅や花のふれ梅  
さうふのゆりやうを  
かこの梅あつて木のたぐ  
二月吉末は是梅、刺梅と醫  
門入を梅す  
幼年や狐のさう  
梅換り  
梅道や梅のさうけの梅人梅















七頃七々朝尺の物もとらふ  
物は白切

花千進ふ花れそしそ友花  
静の葉も尺のそとちの紫の山  
子花

花のやも張る上対の葉子の  
ゆき八檜木とや谷の衣布のしつ  
とゆきまのふらふとこし煙のふら  
まふは只生あ一様のものしつのお  
千ゆきハしつといふしつしつしつ  
雪若の浅をくけぬ  
きひしつや赤北あしつしつあまふら

伊賀の上野の河と初春

えの河横折しつとくそふとふとふと  
あみとくす樹の中より初休とく  
糸流も花尺の中よりハ七と流  
折丸子のふ花

さつしつゆのりゆきしつと樹のふ  
折竹のたし流をいれと樹の思ひしつ  
しつしつハ

花をたわしけしめ流うやせと流  
田亭より流しけしつ  
は流しつと流しつと流しつと流しつ  
は流しつと流しつと流しつと流しつ



茅竹をこし楳尺をこしうひの本を

龍門二句

龍門の器や上戸のちきりきん  
酒のこすかきむらうる 樽の元  
楳 粘きこわきこよ五里六寸

茅竹

器をこしうひの頭のかほりけ  
志をこしうひの頭のかほりけ  
茅尾村をこし  
器のうけ楳のうけ楳のうけ  
大和をこし楳のうけ楳のうけ  
よまのこし楳のうけ楳のうけ

器のけきいとも観あるかの神のみこ

ら通し人の口さうきくはくはん

楳尺をこしうひの頭のかほりけ

支那の東行路を

此より楳をよせり玉意一具

尾張の門人より酒一樽本をこし

活系一解おろしけり人をこし

おろし

飲あけりるけりきお二木楳

舌の根ハ楳のうけし志をこし

茅尾村楳の門人共角鼠をこし

あのみり楳と休りや茅の端



示門人

子より飽とす人子しんたやめし

三浦山の雲しし梅をり画し琴の機

あまのやまきくおとろく舞のたれ

信き吟物ふ

朝の毛はくろくふちや花のや

お落活そすまうし

西行の流と河くむ花の池

鳥子似ぬ散りよとやし神さくら

るまきのふよ

くくやうくくは寺の少女山根

花山

花の山ニ丁のほろけハ大悲園

まゆまう海川の松をきつ

あえくくさす舟をきし柳系

さくくもハなごちぬをきまぬそち

ねぬまのらけくらよ

若子ちぬぬくくはくくらひの嵐のま

上池のちんすすまうし侍に人幕

あさわき物の方小唄のあうさんし

そんくかごくくの松をきくよのみ

よりよまはれ梅ハぬ花尺くくらふ

古書や若ハぬむの拾ひんか

あうくくうふんものを横ら



寝きしつてちのよに持ゆふし  
山家

朝の露を千一花のふた休らふ  
おりのおちうらふ長し一糸さくら  
歌よみの先をみゆきし一山梅  
二尺の岡をおみり

いさよふれ御のるる海のみ  
池の子亭

我名のぬらふしをききぬ雨のち  
伊加ふいた垣のたはまのかみき良の  
いさ様の料に附られくしと侍はれ  
一里うらみふきもよりのぬらわ

扇をきほらむけやあさくら  
似合しや豆のねむし一梅うら

いぬ寺の喬木子亭  
おまの松花や木はふ屋造了  
木のうらにけしと餘り休らふ  
酒屋寺江

四寸うら花吹入きつゆのぬ  
海通のみちけくおむむく時  
子枕さくらとおちんしとる味  
あそ手ぶ替

あそ(やさくら)を起すあのを  
花のうけ現すかえり丸うら



止碇碇

為さしつらふ中傳多しむ山楳

古郷とのなみの園中よこその経を

あつて

まきあや三枝うりもえり前子の経

けりわりの思ひをまきりてはし

芽餅や花のけりてうりて安けりく

木白無り

とふけりたさやゆりて楳麻

依見西岸寺

系存り依見の楳のやせよ

ねり餅了り宮の楳のとれ

尚白と浪善(下)

只一夜楳や丸のうり木幡のれ

古寺の楳や束のむをもとせり

舟安しややうむ村あり楳の楳

とふけりたさやゆりて楳麻

とふけりたさやゆりて楳麻

り頃住るる産をおきぬり人の渡り

おぬけ人多くあそびを具しむまの楳

持る人あそびを具しむまの楳

子の戸も住るる代り楳の楳

重三

青板の泥や走りてうりて楳



おとろしや萬千はあてし海苔の砂  
老慵

塀よりいふ海苔をいふ志のまゝにささく  
海苔子里の海苔

海苔汁のまじりたるは海苔の  
あけりのや白濁したるは一寸

半降下向平に身をむすむ時送る人の  
しゆのまじりたるは海苔のまじりたる

坂子園渡

まじりたるは海苔のまじりたるは海苔の

よー野をいふ海

飯貝や海苔の海苔の海苔の

古代や海苔のまじりたるは海苔の  
まじりたるは海苔のまじりたるは海苔の  
まじりたるは海苔のまじりたるは海苔の

田家

麦丸にやつと海苔のまじりたるは海苔の  
猫の志牛と海苔のまじりたるは海苔の

膳所いふ人平對し

猫のまじりたるは海苔のまじりたるは海苔の  
山海末と海苔のまじりたるは海苔の

悼呂丸

山海末と海苔のまじりたるは海苔の  
よく見たるは海苔のまじりたるは海苔の



圓角廟の漢をてんむ子

おびとすこゝろを子にめわひうれ

昔提山

山寺の山——昔よ提提はけり  
けりの子梨の振種や山屏き

茶店二句

けり——いけり共うけり干解さく女  
茶と——けりも足鳥あつて雀も由

陳菴の信宗波旅子起れりも

古茶只あられあつて陳のふ  
茶中やおるもつらき茶を起  
あつてやりの村——ぬいこりけ

おる存も上りゆふにけりれ  
ひりり中の中のおるわき——のあ

茶種し

父母の茶——茶——種々の茶  
地——茶——まけハおるらしき——のあ  
種——茶——種——茶——茶  
茶子とあつてつるも茶の茶

茶子画賛

もろこしの茶紙つむ茶の茶  
物あや白のぬき茶も茶の茶

下木亭

茶の物あつて茶の茶の茶



起よし 糸友よりおめぐるの蝶

画讃

裾山や如くくはれ又はけし

ふは

あふし〜とふふふふふの地と

画讃

山吹や字治の楕圓のゆほす〜とふ

山ふふふふふ〜き枝の取

大和り御の時丹波市〜とふ

あふ〜しひのふれ〜とふ〜とふの光

あふ〜とふ〜とふ〜とふ

子外〜とふ〜とふ〜とふ〜とふの光

あふ〜とふ〜とふ〜とふ〜とふの光

峰入や一里お〜とふ〜とふの光

此節〜とふ〜とふの画讃

あふ〜とふ〜とふ〜とふ〜とふの家

二条和

教 橋門を〜とふ〜とふ〜とふの光

通就尚舎

物のあを〜とふ〜とふ〜とふの光

ゆ〜とふ〜とふの海〜とふ〜とふの光

あふ

行春や〜とふ〜とふ〜とふの光

田家〜とふ〜とふ〜とふの光



入あは 寝るまじりしはなれ  
寝つらぬ里を 向ものへ入るの音  
空湖水傍ま  
ゆくまををほひの人なきみち

有體

しら通る 疎の梅を おろゆ

自画自賛

しら方う 曳やと 牛の玉  
えりやあま 心さひ 秋のうた  
四すうの 女も志ころも 海うね  
梅のひさし 水きえし 濠洲魚

止妙の舞

糸手 袖の 河城まを 浴れ 指す女  
孤石のみらぬ 行を 途

おく起す 疎の ちおめ ちひの 旬  
垣す 和尚を 悼

咲よも 少れ ねりうら 花のわいれ ね  
袖よこし ちお 回廊の 雲おひき ちお  
すみくも ちお 鏡よさ ちお つく











小坂の中山

いづらふくしつ川のほとけの下まじり

不卜の母追慕

あむけと治とひさくそめ時寺

甲斐文の初内と子家子一ふつ道有

孫若吟

えりふくし我を結く尺くうふか

貞亨文縁手中

ひら川後さうしんふゆぬ更え

えき本もみひとひ葉のひとくうれ

をいんし

浄佛のりやうせれゆふ麻ののり

滑仙や歌ふ合さる珠敷のころ

指提寺

この葉一と月月の末ぬくさや

日光山

あつふふもきやわとくのり光

書尺の儀

志けしつゝい際く花うやまのはめ

おのひあし木さうや回月のはさく

甲斐入山中

山嶽の願 宵 一 暮 一 うち

ゆく弱めまきうあさきむわとく







うやつゝ我を散るの世の心  
帰奉

多る名いさる風をこゝろ  
こゝれとやまをさけく  
大垣の蝶々君 日光寺代家  
あふく 庵 従ふる 家田 何葉の  
藤の心 終るの けし 庵  
鼠の心 終るの けし 庵

波塵  
はたさうい 穀如 満きく 木下  
雪片さ  
木つきた 庵は 破る けし 木

幻住庵

先づの心 杉の木 あり くら 木  
別田友

二やうく 子規 筆 一や 黒方 の 候 底  
楊 柳 川 舟 中 舟 対 舟

珠堂り峰のぼる二首

はたの 海 舟 夫 先 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
素尺の 鏡

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟



おとろしをあらうとて或は殺生石尺  
おとろしをあらうとてあらうとてあらう  
先づおとろしをあらうとてあらう

昔末うやういふ力力何れ何れとて  
おとろしをあらうとてあらうとて

おとろしをあらうとてあらうとて  
おとろしをあらうとてあらうとて  
おとろしをあらうとてあらうとて  
おとろしをあらうとてあらうとて  
おとろしをあらうとてあらうとて

おとろしをあらうとてあらうとて  
おとろしをあらうとてあらうとて  
おとろしをあらうとてあらうとて

おとろしをあらうとてあらうとて

おとろしをあらうとてあらうとて  
おとろしをあらうとてあらうとて

おとろしをあらうとてあらうとて  
おとろしをあらうとてあらうとて  
おとろしをあらうとてあらうとて

おとろしをあらうとてあらうとて  
おとろしをあらうとてあらうとて  
おとろしをあらうとてあらうとて

おとろしをあらうとてあらうとて  
おとろしをあらうとてあらうとて  
おとろしをあらうとてあらうとて



菖蒲舎

柳のやうに青もよきの小料理の百  
そまゝにやすらひ

とへらへら。標や雨の花くも  
白けーや射の赤の笑つてお

踏社園

白きしに胸もく膝のあゝみ  
次磨

海士の島まの足くくやけーお  
岱水亭

雨のしゝ思ふくくもよ子苗外  
若井

同一枚植るなら古柳うれ

奥州合の志し出

あつひうし、まのまの風のも  
早苗くも赤もく思ふなり歌うも

みられくの名おし、思ふくし先園屋  
の能まのうきまにさきまうて合

此白川もく思ふく思ふく思ふく  
單腐等思ふの芳思を柳の陽園は

かゝ故人の遺書くし  
風流のくし、めやれくの回植書

志のふの歌思ふの思ふく、や又思ふ柳の芳思  
とく方ニ思ふく思ふく思ふく思ふく







昭生 角つらうりけり 波戸河

浮たふ本名流す 赴く時 二方

しや人の如くもあしく 本名流の塊  
粒のまじり 流すも似よ 本名流の如

届ふの山家

母まゝみまの 届ふも ままゝも

清風亭

とらぬわよの山 届ふふの 山家の如く  
牛のまじり 流すも 対お 終のまじり

小笠原

しむりや 夢とあし人の果

甲の山 終の山 流川の 流すも 似よ

其もや 折の字 数す 起す 時

本園亭 折時

鳴りよし 牛 振るり みるのと 室

坊 隠者

寺の人 乃 尺 付 ぬ 花 や 持 ぬ 梁

又らえん 小 花 の 中 心 たり 松 魚

ういもを 受い あり 人を 破す む

強 命 を いきし ちきん 柳 松 色

やみの 花 や 葉 も おもひ して 柳 松 色

走つ川 流す 何れ 又 走つ 何れ

つ 井 せし 花 あり して 柳 松 色

大津 河 仙 舟



此言をえ熟くしぬ處うら子

武隈川、とらふのう休言すしと送るし

休言居士の向や、清くかゝる

多言、清くし人のしとや、休言居士

武隈のねし

楳より、ねし二本を三、月、越

みし、ねしや、清く、清く、清く、清く

清く、清く、清く、清く、清く、清く

清く、清く、清く、清く、清く、清く

清く、清く、清く、清く、清く、清く

清く、清く

清く、清く、清く、清く、清く、清く

あきふ、清く、清く、清く、清く、清く

病中自叙

あきふ、清く、清く、清く、清く、清く

あきふ、清く、清く、清く、清く、清く

武隈川の水清く

あきふ、清く、清く、清く、清く、清く

醫王寺

あきふ、清く、清く、清く、清く、清く

あきふ、清く、清く、清く、清く、清く

あきふ、清く、清く、清く、清く、清く

あきふ、清く、清く、清く、清く、清く

あきふ、清く、清く、清く、清く、清く



ま—カハハ川に五月のめい—  
あつた

ま—の海—  
ま—川

ま—の川—  
ま—川  
ま—川

ま—の川—  
ま—川

ま—の川—  
ま—川

お海川くち作り

ま—の川—  
ま—川

ま—の川—  
ま—川

ま—の川—  
ま—川

ま—の川—  
ま—川

ま—の川—  
ま—川

ま—の川—  
ま—川



夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行

重行亭

夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行

正成之傳

鐵肝石心此人之情

夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行  
夏山や松千々々一里行



やうきいふ蕨の枝に  
昔枝の如く移るものさうし  
いふと悔み

もろき人なりはやくおちの  
秋ゆふ人も志をくはる路  
うき香をさひけりさうん  
秋の枝に我をまかりし  
輪我の心

持経のひくやうの  
三石寺  
志のこもる志し入るみの  
寺寺迅来

やうきいふ蕨の枝に  
昔枝の如く移るものさうし  
いふと悔み

もろき人なりはやくおちの  
秋ゆふ人も志をくはる路  
うき香をさひけりさうん  
秋の枝に我をまかりし  
輪我の心

持経のひくやうの  
三石寺  
志のこもる志し入るみの  
寺寺迅来

やうきいふ蕨の枝に  
昔枝の如く移るものさうし  
いふと悔み  
もろき人なりはやくおちの  
秋ゆふ人も志をくはる路  
うき香をさひけりさうん  
秋の枝に我をまかりし  
輪我の心



三十三  
の心を酔った島あやうさの乳  
ゆふあやう干瓢あひさつ遊ひたり  
任る人のあやう遊ばう養生をけ  
る古法をけり

瓜作る果のあけなをよみすみ  
河津和波あやう古く長瓢を瓜に  
花をいけり下りあはれ色をてま  
く花生るうさる果を播く  
瓜の赤志川くいのあやうわかれ子  
岩持あやうのまのあやう遊  
臨我あひの松の下鏡原し長年の  
無きことなきあはれ

山さけやあをききん瓜さけけ  
花とあはれと一度う瓜あはれけ  
あはれあはれとあはれけ  
夕平とあはれとつる瓜のあはれ  
初吉素あはれとあはれあはれ  
吉素あはれあはれ  
あはれあはれとあはれ瓜の泥  
板骨解片あはれしとあはれ  
あはれあはれ  
あはれあはれとあはれ割し吉素瓜  
瓜のあはれとあはれあはれ  
あはれあはれ



夏の花や崩れてのしり冷し物  
きり花は是とひのほろ清き如

岐阜山より

城治や古井の清き先河を

船次の温泉の種を煮る八幡宮

道にまうてまね一方にあらま

湯を流すちのひく同し清き

弦のうさや歯のひく志す山が

次方より

月を足して物さしはるや清き

月を足して物さしはるや清き

明石相泊

増意やさうさふまうさるの月

まをさしはるのひまをさる月

まの花やこころのゆるる花のさ

るの月は油のゆるる森坂や

晋の洞明をうらやむ

まをさしはるのひまをさる月

秋野をうらやむ

まをさしはるのひまをさる月

井野水楼

まをさしはるのひまをさる月

まをさしはるのひまをさる月

まをさしはるのひまをさる月

まをさしはるのひまをさる月



人しむる山は木はけり藤を伝は  
るをいひけり

又たふらふのよむ川の幸魚 鮎

くさくさの草はさるる草はさるる

おもしろくもわらわしき船舟は

おもしろくもわらわしき船舟は

家名を継ぐ二句

いづくも行くる扇や雪の峰

雪のふりし月をうきまはるる

枝をくつてきりうきまはるる

雪のふりし月をうきまはるる

六月の峰はけり

あそ月や鮎の幸魚も  
清瀬や浪りあそむる  
みふれをさく病やみの  
かかすけぬはるる  
松風のそよぎるる

石川丈山の像

風うきしるる

舟

舟をいへるる

小倉山

松林もなめてわ風の幸魚

遊力亭



さるみや風のありくおお拍子  
湖や川のさきを懐かむやの峰  
蛤の口を欠け居る若らる由  
破燈の千の鏡や弱く又すきみ  
池深鉄ぶ

わすれすゝおねの中へ山へすき先  
まよふをさうくくもをかきみの糸  
まうさ木の方へ下つてりけり  
おふ人のお袖もいりや去月干

十八楼記

山阿しり月を尺ゆゑ物とれ涼し  
清風亭

涼しさを香やりにて初まらし  
四折もわのうらやみの音もさみ

羽黒山

もろもろやわらをも葉うら南谷  
すくもわの海の子る月共羽黒山

文鏡子む山の像をも照らすは

南へ佛も多は甚も涼し  
新羅風流亭

まのれくお宝もる柳  
袖の海の眺望

あつみ山や吹海うけさみす  
寺名目今亭



笑ふもよき海平入るるもよみ川  
象傳や高千西施、新ふの花  
以趣や朝短めれて海深し

ぬり法沙

きんうらむおちたてしつはなうらむ  
花の上こころあはれつゝ  
花の上こころあはれつゝ  
もろこ樹満寺のまきこころあはれつゝ  
法波もひさきこころあはれつゝ  
又晴や休るる平涼む海の花  
小鯛さしや柳さしや海士、新  
川中、其根木よりとらぬすみ

四原の河原納涼とて月夜の花さし  
まゆらむこころあはれつゝ  
夜中さし海のみ物さし女は帯は  
張ぬのさし男は相好長き髪  
しは法沙志人さし梅屋張  
法屋のさしこころあはれつゝ  
川風や春のさしゆきさし  
妙翠亭是田家納涼  
飯砂さしかき、張毛やよきさし  
きき亭  
涼さし直さし、妙松の枝のさし



野水新書

清き水は松園に交わりて位はのち

東武より上りて人しよに

東流の毛腰よりしよに

野水亭

清き水は松園に交わりて位はのち

東武より上りて人しよに

大澤木節亭より

秋らちやとて流のよもや

考

長原信玄

みえとやれおとしの

長貞亭

海はとてはえ海のち

松島

多しとやとてはえ海

松しよやとてはえ海

野水亭

清き水は松園に交わりて

叢心の村

秋らちやとて流のよもや



秋虫換 柳を柳手折るもよしの 一葉  
わらわの 柳の 柳を折るれ

さみしけり 柳の 柳を折る 柳を折る  
李青く 柳を折る 柳を折る 石阿小舟

旅人三信州の 柳を折る

柳を折る 柳を折る 柳を折る 柳を折る

定例の 柳を折る

汗の 柳を折る 柳を折る 柳を折る

昔白秋の歌

寛文巡幸天和手中

張ぬ 柳を折る 柳を折る 柳を折る

秋末ぬ 柳を折る 柳を折る 柳を折る

内子 柳を折る 柳を折る 柳を折る

七夕 柳を折る 柳を折る 柳を折る

名所八休の柳 二句

星舎の中 柳を折る 柳を折る 柳を折る

八節 柳を折る 柳を折る 柳を折る

懐老社

懐老社



秋風も吹ききり秋影するは鏡、  
 三日月や秋の月夕の光の如く  
 月をこぼれをわの柳をこぼれ  
 三日月や秋の月夕の光の如く  
 月をこぼれをわの柳をこぼれ

優了す九月の月夕の光の如く  
 尺渡をも、秋の月夕の光の如く  
 六分の月夕の光の如く  
 古郷の安否を

角梨やたぐも出羽のすまゝの取  
 画賛

秋の月夕の光の如く  
 秋の月夕の光の如く

松多れや秋の月夕の光の如く  
 有るは秋の月夕の光の如く  
 月夕の光の如く  
 桂男す月夕の光の如く  
 廿二日や秋の月夕の光の如く  
 新八天の下たるは秋の月夕の光の如く  
 室中や月夕の光の如く  
 色づくは秋の月夕の光の如く



秋のきものや戸のしやとてり  
くけもあし水生木やもみら  
武花や茶対仁あをもえとてり  
政以古  
歎先とてり

名月のあしや五十一ヶ條  
寺くと名月の花や原向山  
流くや江戸をえかれふ山の月  
木も伐てりもといふやうの月  
有 蘭 草 菊 宜 止  
減之や肩に櫃打うて衣  
武花や一寸作れ花の香  
秋のあしとや秋花のいさ

えきぬいりけりて火中  
後糸の秋物のあしを  
雲の松そきとてり秋の  
あのとやあとの秋を堺 所

茅舎の感

芒草対ふとてり  
とてりあしはるる  
ひれうとてり此斎も  
秋のうれ男はほぬもの  
花本輝 裸 音 ね



唐黍や軒端の萩の取らる  
重陽

さるつやおらゆく菊や朽木を  
近江海を通り信濃の山に  
くし放たるとまのうよのきぬ  
行く

利きくるとまのきぬのきぬ

貞享元禄年中

写海船中

初秋や海とまの田の一みと

くつ秋やにみきうけぬ帳の縁

一頁に書く

久月やらうしきり秋やうけぬ

あやうき

葉梅や竹簾を秋にふりかすの川

合歡の木に秋をうけぬ星のうけ

まふきの母七十あやうしきりの秋七月

七のうけとあやうしきりの秋七月

題とくはうけとあやうしきりの秋七月

うけとあやうしきりの秋七月

七株の秋のまふきや星の秋

何れの秋代もうけとあやうしきり

和歌



くみ

七夕やととのひに候は 係 施

吊両望

言水や一歩に候は 宿宿や若のよ

時寺亭子

七夕や秋をさきとむら ぐらめり

宿麻寺

宿宿のふいそ 死にのけり 松

宿宿の宿の宿に 宿宿の宿の宿に

宿宿の宿の宿に 宿宿の宿の宿に

宿宿の宿の宿に 宿宿の宿の宿に

更科の宿に

宿宿の宿の宿に 宿宿の宿の宿に

宿宿

宿宿の宿の宿に 宿宿の宿の宿に

宿宿の宿の宿に 宿宿の宿の宿に

宿宿の宿の宿に

宿宿の宿の宿に 宿宿の宿の宿に

宿宿の宿の宿に 宿宿の宿の宿に

宿宿の宿の宿に

宿宿の宿の宿に 宿宿の宿の宿に

宿宿の宿の宿に

宿宿の宿の宿に 宿宿の宿の宿に

宿宿の宿の宿に



ひかしくと驚きとふかしくと金おひ  
家亦よこ

稲妻とくまのしとくやみの代婦外  
言敷か

わけやまを稲妻とくまの代婦外  
夜初織のけこまんとくまの代婦外

いれつとくまの代婦外  
稲妻とくまの代婦外  
お万とくまの代婦外  
さくとくまの代婦外  
いけとくまの代婦外

はかしくと驚きとふかしくと金おひ  
家亦よこ  
稲妻とくまの代婦外  
言敷か  
わけやまを稲妻とくまの代婦外  
夜初織のけこまんとくまの代婦外

画譜

ありの字難とくまの代婦外  
言良し  
さくとくまの代婦外  
いけとくまの代婦外



岩峯公をく可蓬萊方丈八仙の代あり  
まのゆくと士峰代と掛て奉天をお  
きえ日月の存と雪門をひくくありとむ  
うふふこれおとししすて美奈もあす  
詩人と句をぬきす才士文人もさうと所  
画子も筆を捨てけし中 藐姑射  
孔巧の神人ゆつて其侍をよくとむむ  
其画をよくとむむ

や西方は時 時 百原を中画し  
頼妙向不二を尺ぬきおすしんふ  
秋海棠西瓜の心ろりすあすろり  
玉川のふりすおを色すをよとむ

ひよりくくとあはれけしや女即ち

くすし何りの像

むくあを宵中しあふくはあけ  
う上の吟

是くこの木枝をさすう喰れく

言田醫師細川青虎亭

葉欄すいつはのちをこす 枕

加賀玉子入

不編のまやをけ入存るる後海

山松のしよもさし

まほくしき名やおねい 暮れしき  
そ秋多や一夜そやとせ山の犬



観水亭

ぬれくゆく人かたしや雨の秋

狩の伝

浪の石や小貝やまじりて秋の暮

いろの伝

小秋らしきまじりて秋の小いひもさき

画譜

まじりて秋の暮をさしぬる秋のくわく

ひる川あやうき女もさしぬる秋の月

花を言ひ申子の花もさしぬる秋の月

尺三

風いろや志とらうき花の秋

敷賀寺茶院

門より入らば秋の暮をさしぬる秋の月

説書お尚の伝をさしぬる秋の月

鳥をさしぬる秋の暮をさしぬる秋の月

茶店

茶のまじりて秋の暮をさしぬる秋の月

お女の画譜

枝よりお女の秋の暮をさしぬる秋の月

まじりて秋の暮をさしぬる秋の月

お女の秋の暮をさしぬる秋の月

け寺をさしぬる秋の暮をさしぬる秋の月

秋草茶



是はそし角力取子の花乃家  
付替け斗從ふ山を討まて

昔まはまきいりても多し山は  
三日月の波を木片らし昔まの志

知只の力無き老の秋老をかたす

よふおわを在らんよふ戸の栗

初秋中の一日はあつたてき船の題を白

名うけや秋をいふしぬう南

か加ふよとこと

無坂りゆうつわりの玉あう

う新山

玉あうりよふも後坊の多うり

元喜貞のあさうりつとみ

愁もくぬ身とれれれれ玉あう

善池やをうて世や玉まう

甲戌の秋大徳寺付くしきこのうみ北

許すう消息をいれよまは四里のゆき

命をいふよ

家まこれ枝や白梨りまう

後骨の護

夕風や雪打りぬく多世

切しきけ縁父屋さくすうい取

許すう画平

晴角力い川と上るよ平菜の食



夜よりけんとし句を、書きたるゝ思  
みゆの繪子

秋のいろぬの味塩盡とあつくらう  
志川うきや結つゝる聲あまうしくは  
むとこすき宵やみとくし虫のあや  
床をさすうひまよ入かきうしくは  
物ねしくし習すしむきまをくは

右田の社社

むとんやぬかやのふのきうしくは  
白梨ぬく秋のうきやきうしくは  
きひしきやあやうしくはうしくは  
あまのうきうに住すひくは秋の風あや

けあうくあうれ友とあうつうり

みの法れ音をよめり木よきれ虎  
蜻蛉や取つあうりしきよの上  
あやうしくは秋のうきよ法外  
光の影はあうりしきよ四十夜

田中の法花とあうりしきよ

あやうしくはあうりしきよのあや

田家

あうりしきよ田向のあや里の秋  
あやうしくはあやのあやあや

田家酒家

あやうしくはあやあやあや



庭の目もつらや言ぬや  
稿すゝも草の木さけや  
青くてもつらふものも  
かくさぬそや業汁の  
丈風おあしこも  
木曾塚の田草に在る  
草の戸をきれや  
柳の軒を  
金昌ち  
庭掃るもや  
画説

能波や原の草の時  
聖白  
病るは  
海寺の  
同手  
素良  
い  
つ  
修利  
杖の竹  
栗桿  
故人







高島根本寺より

月々や一柳を雨を持たし  
寺々を雨をまきと息を月尺可外  
田舎より

路の子や稲をうけと月を尺  
いよの草や月の中里は鏡 留

大層根成院より

何事か天を平と心は三月の月  
あは中々舞結き一宿の月  
姨控ふ

俵や妹ひくくは月友  
いよよひもまの更科の歌の歌

善光寺より

月うけや何門何家も只は月  
仲秋の月を更科の里姨控ふ  
うきや新あまの月もまはれは  
ありく長月十二夜平ありぬ

木石の瘦しきまのあまの月  
はあまの糖をうきくは月を尺  
清か納まの糖はうきくは月を尺  
ときをうきくは

あまの月や月尺の歌の歌  
月尺よ玉の月を尺の歌の歌  
尾塔下



月と名をつてみよきやいもの秋  
花山

義仲の宿見の山に月出  
香江の秋

月清し遊女のもてつ砂の上  
敦賀花泊

名月わかふりかきしめさぶ  
侯

月のみる高き角力もあつて  
仲秋の夜つとてつ海に物

いづれは海に清く映るついで  
西のちの月をいづれかまよふ

秋下さるる高き引揚るる

ついで

月川の陸をさし海の色  
木因亭

月れかや月と菊と千田之及  
斜殿亭

戸をひらけし山あり伊人の花  
千もようは花ももつは只是孤山

の秋あり  
そまに月も花のまし伊人の山

伊都ふ又云く物もつは  
そまの男の伊都く物もつは







名月や朝霞空を千層  
名月や露を筆架のけぢりし  
名月やこのたふらぬ川流坊  
消息

多阿つてあつておのれを  
紫の心もきけいし  
吾子このまきあふそら  
東山平住る侍をこらう  
よまをまよひし  
いさあ、あつてあつて  
茅庵の坊つり  
案の戸は月やをちる

石山寺の僧

橋柳は三つに月を  
松の長衣  
くわにひ起ても月を

深川

名月や門をさす  
柱は松風松風情を割  
曾良然水は物敷  
月のよきほひ

名月や  
深川の末に舟



川を此川にや月の友  
いさぐひをさしつゝ園のそめめ

風蘭初七日詣暮

尺一やそちりんさきの三りの月

東照傳

入月の法を机の四隅にさす

松水亭より

新待下菊の委好する巨府車

侯爵の山中より

名月の花をくたして下線をけ

名月を林の妻や田の曇

兼去後より

七の宿路より 野の月の十六里

住吉の市より

非買くかふ多る月尺うれ

畦止亭題月下送使

月すむや狐怖る火の修

甘梅亭より

秋もさわさつて中月月の歌

名月や池をめぐりて松をさす

山守の心ゆたやあゆの月

わのわらわは角丸新を道の月

かけさしや先思ひいら物あへ

棧や心のらをさすむきさつ



芳野お泊

礎亦くゝあまのめをよわ坊りつ月  
あり燈さす水斗りゆく礎うれ  
露ひふハ猶お小袖をきぬこけ  
ふ里う旧里こし

鹿牧亭こし

除弓や習を子慰む竹のたぐ  
書植く木田五木のあしーゆ  
神のやまのまはるきもあつーく  
昔のけしをせうしめふるお葉外  
鬼灯ハ家もあてもかゝもたみらぬ  
よー神こし

海原寺をけりてまのふハ何ぞ思ふ小寺

母の白髪こしわりのみこ

あまこゝハ溜ん流るゆりお秋の露  
初葺やまこり敷経ぬ秋のつゆ  
おとけやーぬ木あまの園さく付  
お葺やわかぬとけとハ松の影  
葺おやあふふいりく又お時あ  
窓水ふ楚

露くたろ木の露さあの家拾りや  
木さりの梅くまきあの人けお産うれ

李内吉木の二人子

お菊おと柳とくぬ きさ子の院



尺野守翠亭

里よりくす枝の木枝ぬわさるし  
まふ柿や一口ハ喰ふ猿のつゝ

望田素淡可休亭

祖父と親を子けはるや枝みん  
橙や侍ぢおれ白子の店きし  
何喰く小茶ハ秋の柳一りけ  
休も孫を膝くふ久くわ菊のちか

草葦の西

起ゆるる身むのうしよは河と

左柳亭とし

えわくきりぬるもつろし 右の菊

蓮池のふら桐まんの菊をわさすきの六  
龍山の雲をひらきくさを海に  
鶴のねをさすいぬくねたなをくれ  
とさすうねわすぬき流らすとわ  
あゝあゝとて

つさよひのいろ花らと菊を流す菊

山中の温泉とし

山中わらわすたなまゝぬ湯のふひ

如行亭とし

瘦ふのうらうらふふ菊のつちみん  
菊のちかたなまゝぬつこぬつこ  
田かたしん







以上の破局をあらわす

秋の風を記しては初をきき古の  
懐於子

懐於子

秋の風を人知る事秋の風の

義のゆるる事秋の風の

秋の風や藪もさけも不破の

より志みく大根ありし秋の風

一笑追善

境よりさけ余はあり秋の風

道中

秋の風

牛乳屋の故のあり秋の風

秋の風

石山のありし秋の風

贈桃矢号

秋の風を記しては初をきき古の

懐於子

秋の風を人知る事秋の風の

義のゆるる事秋の風の

秋の風

秋の風や藪もさけも不破の

より志みく大根ありし秋の風

一笑追善

境よりさけ余はあり秋の風

道中

秋の風



伊勢紀行の跋

西 未 あまのれさおのり 秋の風

悼松倉翁業

秋風千折る如く 志業の杖

野水の流石を送る

尺送るれうーろやさひー秋の風

物置亭題板字

乳麵のいづれ 替えたる板字のよ

麻呂神前

此 ねの夜 生き代や神の秋

為ふ

送るときはおろく果ハ木片の秋

さうさく秋よ時ちおひと川邊

種のはな

さひーとやほたる膝の涼の秋

おの菴

松 齋 やおの夜さうーふ秋の山

小松木浮桐実無り

秋千ささくゆのそや実る小松川

松 齋

此 秋をちて季たるおのり

車室亭二句

殊の花をさ歩崩しーし 咲おれ

あーいおのりさうーもあみさくおのり



きつう一人の青竹のやうに朝起  
せは

神もしるふ秋の物や木や亭も  
木因亭

死をせぬ松の節のまゝに秋の  
いづれかおせしめて聖子かたれ

深川の庵

稗郎の扇をさしきりて秋の  
枯枝より鶴のさきさき秋の

雪竹の像

こらゝちけきもさしきりて秋の  
所思

此花やゆぐに秋のうた  
り秋やあそび引もよみ者  
蛤あそびをわづれゆく秋そ  
内おひりささかしてかやの  
をのみけり

石やゆぐに秋のうた  
ゆく秋のうたのうたや青宮  
せき柏亭

秋は木陰の影にさす人

清ののま原のま

秋風の柳をわづれゆく秋の  
行秋やまを度けり葉の



考證

悼仙風

子向く半ハ量なり仙くもさ  
 妻海長光奈その戸よりあきさ  
 けしきも草々  
 何よりもさしゆふとさしゆふ  
 武義地の方の若生や松島の鐘  
 又の鐘やうふさるるはに秋の  
 月一燈西の光

現況ふ言さるにわくく昔はあ

一草菴の席上郷食庭を制く

きくふかききききききききききき

歌の終

米のふふ射を孤舟を乃もく  
 みのきりけし舟も入やきりく  
 等哉よあゆむ  
 名月ありてあやうん松の海を  
 人子まききききき  
 世の中を松葉丁ろのそのの  
 鮎丁の歌又も舟のそく舟  
 秋の神やそのの中へく風の舟



花雪千おろし

まひしきもつらふれぬう桐一葉  
夕月や初も夜しきとほひの  
秋のくほ家も亭さる中一柱  
はひ井伊家の都に海ちをきく  
侍古もかたし家もつらひ信てかたし  
を待うちの休さうとそそ中ねよ  
よのふ今もたけ侍家もつらひ

爰句みり教

爰又也會了和手中

雨の鏡少きなり又く中月の正有  
ゆくをくわかのぬるく村時る

戸田権吉文亭

一しと行孫や降く小石川  
し川く時雨傘もさ提て物倍  
大吹竹さきや志く花く小豆食  
むく時向てくれくれ断の人多く下  
ろく燈ても多きほめくわめく

深川大板の巻

梅の春の浪をちて結氷く和風



つらねてあやきのふいこくくし  
負山は釜をぬきてあやき

茅舎買水

冰若く偃嵐、岫もくくく  
小舟若くや手習ふ人の居る  
坊上ーくもまをけりむね

龍安寺

山よりふもさくは空の  
白雲わかぬ海島、志の

張笠の尻

去りふもさくは空の  
をのりれりては幸の

浪のちとさるやぬきく  
くさのさ相海を國の梨の

耕月亭

ををわの上戸は鳥やいれ  
時あさやもくくくく  
ゆきすすくはけさハ小紋  
是れを何くもくもく

おんれん人の汗

志得れぬやあさの  
室の弦や咽 皆志あつ  
をさふ心ハ南の枝や  
みちゆく各所の内指



山々猫焼くさいさわきりひ  
ちりの日や露沙の雨ちりさき霜  
萩尾八重一異天とをきり尺ふあふ  
きり木満地さきさゆむ  
ゆきの釣ひさき干鮭をかみえさ

名所八体の内

松島や雪かきり地の名くら  
子代さきり天のまんはらあき海  
さきれつ子業飯さつまさきり  
此さきり花あきりさきり  
乾鮭や何可一屋を毛に人  
あきりさきりなつさきりさきり

一休さきりさきりさきりさきり

貞享元禄寺中

元禄寺田初冬九らすきり菊園  
まじりの言をとれきり月のさきり  
けりては八世派八初さきりさきり  
菊をひさきり対林寺初さきり  
且六展寺初のたりさきり  
元秋菊をひさきりさきり

菊のさきりさきりさきり



桐葉のめしを海うらさうりれはまはけ  
とちかきあまをきしほかに

け海子り子難控ん言時雨

是のほろろし時雨をみひく

望もさふあもしとこいひと

字状大もしとこいひと

時雨ゆくや舟の帆隠し取付け

難けあましりし時雨の生るけ

人の海しとめしゆえこ

とら時雨初の子を委時雨に

とやこふしとらふ時雨のむく

らのやこいれたくとも袖を

あたらきこおとま可あまやた人

旅人よと家たふとくれ首飾時雨

一尾相をきしとらふるふこの

伊賀とん

初時雨籠くこみのをりきこ

四里のそすのし

志くしとや田のゆし株の思ひは

美徳書け言罪おしけのそす

作し木井庭をいさめし時雨これ

も田野塚をいさめし

さしとらふをさのしすし時雨に

さすしとらふの大井川



許六亭

いふをうへ人もまふたうらむ  
新行のお節こまきしとれ  
山崎く井出よかきしとれ  
学究

人しを世中へおんまきとる

支那亭

日切り 堺の海をまひりし  
燈一子や古志ゆき燈りの光

慈向亭

志のふしん 枯る餅ふやま  
おの後の音とこらふ

お花の枝をこらふとこらふとこらふ  
お花の枝をこらふとこらふとこらふ  
お花の枝をこらふとこらふとこらふ  
お花の枝をこらふとこらふとこらふ

大根引

お花の枝をこらふとこらふとこらふ  
お花の枝をこらふとこらふとこらふ

消息

お花の枝をこらふとこらふとこらふ  
お花の枝をこらふとこらふとこらふ

お花の枝をこらふとこらふとこらふ  
お花の枝をこらふとこらふとこらふ







あつらぬいふをいふ

母かゝらぬ尺さや枯木の枝の長

大津をさる

三尺れ山もあつらぬ木もあつらぬ

月の海もあつらぬの思ふもよ松の心

をさる

そのころの海や海をさるあつらぬ

あつらぬあつらぬあつらぬあつらぬ

既千百年の相ふあつらぬあつらぬ奉

加の解よ曰竹村のあつらぬあつらぬ

とあつらぬ木之物あつらぬあつらぬ

あつらぬあつらぬ

百季れあつらぬあつらぬあつらぬあつらぬ

あつらぬあつらぬあつらぬあつらぬ

あつらぬあつらぬあつらぬあつらぬ

あつらぬあつらぬあつらぬあつらぬ

消息

あつらぬあつらぬあつらぬあつらぬ

あつらぬあつらぬ

あつらぬあつらぬあつらぬあつらぬ

あつらぬあつらぬあつらぬあつらぬ

あつらぬあつらぬあつらぬあつらぬ

あつらぬあつらぬ

あつらぬあつらぬあつらぬあつらぬ

あつらぬあつらぬ



百の端のふみをおもひよ生るる福  
ふらふらふらふら

あまの津か田原のふらふらふら

樽七ふらふら

旧里を去る志はくく回中をふらふら  
らふ人あり家僕何なり水木のおふら  
ふらを苦しめ心をひらきふらふら  
奴阿段の功をひらきふら陶侃の奴  
をふらふら漢やそふ人ふらふら  
物ふらふらふらふら下位ふらふら  
上智の人ふらふらふら於志鐵肝  
はゆふらふらふらふらふらふら

こころふらふら

先従く梅もく海の中もく

子川亭の遊ひ

おふらふら伊吹もふらふら

防川亭

美を梅もく花もく折端は

熱白梅人亭を遊する間を思ひ

ふらふら白き浮子もふらふら

ふらふら白雪もふらふら子二人の梅

先樹後の名をふらふら

ふらふら梅もくふらふらふら

ふらふらふらふらふらふら

二十



此里をば 経心子とて 母の院の法  
門の巻をば 母の院の法門の巻  
美ららば 里人のかたが 侍るも 侍るも  
此より 侍るも 侍るも 侍るも  
とて 侍るも 侍るも 侍るも  
梅は 花の 入 梅は 花の 入  
あまの 花の 入 梅は 花の 入  
さくら 花の 入 梅は 花の 入  
河下の 花の 入  
相築を 焚く 子 杖の 子 杖の 子  
古田の 杖の 子  
家々の 杖の 子 杖の 子 杖の 子

孫乃や 杖の 子 杖の 子 杖の 子  
三河の 杖の 子 杖の 子 杖の 子  
此の 杖の 子 杖の 子 杖の 子  
杖の 子 杖の 子 杖の 子  
李の 杖の 子 杖の 子 杖の 子  
うの 杖の 子 杖の 子 杖の 子  
元起の 杖の 子 杖の 子 杖の 子  
なまの 杖の 子 杖の 子 杖の 子  
あまの 杖の 子 杖の 子 杖の 子  
仙化の 杖の 子 杖の 子 杖の 子  
神の 杖の 子 杖の 子 杖の 子  
塔の 杖の 子 杖の 子 杖の 子







物言ふたふらふら  
言更ふらふら  
屋も下らぬ  
春の心  
花もけり  
軒もた  
中  
汗行こ

君火を  
秋の  
抱月  
市人

中  
杜  
取  
雪  
松  
た  
旅  
川  
寒  
海



閑居箴

酒の免いはいくし酒のさうりよりの世

の海難業言亭

系すしはまのよめをちかしの世

熱田伊勢守

庵直すはくしはくしはくしの世

古寺の境やぬを思ひかこ越人の路の

二人尺一重なりしはくしの世

懐信濃郡松

をよおや積金の世の世の世

いさしはくしはくしはくしの世

山中の多岐を遊びし

ちりのり平鬼の波は巻つと世

え原己冬奈良大佛再興

とらまやの河大佛は柱と

初雪や和雪小僧は笈のいろ

村のさきの住人とあんなまよささ

程くおの後志架の里をほこり

あつて大津松本河を智恵なと

老尼の海をさるる初雪はと

おろしはくしはくしはくしの世

少将の危はくしはくしの世

山水遊

比良の上をさるる初雪はと



大空や雲のひらく 信義の家  
三秋を 経る 深川の 軒 庵の 向き けり  
旧友門人 自らに ちかき 木さけの とも  
可いこと けり

とやの けり あり けり けり 枯尾 花  
けり あり けり けり けり けり けり

小町の画額

けり あり けり けり けり けり けり  
けり あり けり けり けり けり けり

本 巻の あり けり けり けり けり けり

深川大橋半の画額

秋 空や けり けり けり けり けり けり

秋 空や けり けり けり けり けり けり

竹の画額

あき けり けり けり けり けり けり  
けり あり けり けり けり けり けり  
けり あり けり けり けり けり けり

深川大橋半の画額

あき けり けり けり けり けり けり  
けり あり けり けり けり けり けり  
けり あり けり けり けり けり けり

あき けり けり けり けり けり けり  
けり あり けり けり けり けり けり  
けり あり けり けり けり けり けり







旅のよき言は河をの夕有歌  
有きらき河をの夕有歌  
河橋汁や鯛もやのよき言  
河のよき言も奴僕もよき言  
のよき言

兄弟のよき言もよき言  
素のよき言もよき言

河のよき言もよき言  
河のよき言もよき言  
河のよき言もよき言

自画自讃  
河のよき言もよき言

石山はるる言はるる言  
河のよき言もよき言  
河のよき言もよき言  
河のよき言もよき言

河のよき言もよき言  
河のよき言もよき言  
河のよき言もよき言  
河のよき言もよき言



かゝるにやの瘦も寒の井  
肉花の富年減らん年々入  
かゝるにやの瘦も寒の井  
手らぬぬ道長く字難と記さる

自好歳

おとよふ人は幾くも心志の春

画體

ゆく事や汝、親お少ねる事  
うら（と）事うら人か古曆  
季ころれ三人よらるる空舞うれ  
煤掃やきぬく言のきこひま  
年の市路色うらやもくわふ

月夜にのさぐるきりし季のらけ  
旅の音こも尺一や浮きの様とくひ

旅り

煤掃ハ秋の木下新嵐うきま  
まゝとたひ木の。棚つゝ大工うれ

常冬への詞

古伏しや筒の膝下位年の暮  
ぬらう人子ゆかぬ秋もけり年々暮  
何干けは河老の市にゆく物

五百丸元帳の終り

まやまきとまきと尺おけは河老  
昔季の木の末れは丸掃と河老







物よきを治松島と行ふ法

酒のなれとく人の終り

月花のふくも海のみひとく外

貞徳宗徳寺武の画像

三島のゆれぬ天工とくけえく心通を

兼弟の侍ふけいけい遊人の後つれ

えをもめふささるあや

月花のくはたやうくのあや一花

題名生

此櫃のやうく一棧の梅竹木を

四山の絵

物心と川流とくあきあせうの

布袋画像

よの海やふくらの中は内と花

考徳

越の新繪

海手陣のやうくしきほろあ

系がくまらくしきわの電

深子や是と湯子火陣の家

画像

了はくしきを踏み足す板敷

けいめいあやとくあやとく一画に



右八景八宗房の所の秋の景  
 餅の花やかきしきさきさきよめり  
 大車のかねすみみしき  
 梅干すうらふきさきさき  
 幸崎の船  
 翠色の船の上の跡残りねは律  
 粟津の船  
 さきさき人の波さきさき  
 夫船の帆  
 さきさきみさきさきの帆の跡残り  
 比良の山  
 さきさき白衣のそ物比良の山

石山秋月

けやうぬにすよけの秋の月  
 激る夕思  
 さきさきかきさきのぬ網のたき  
 望河の景  
 さきさきかきさきのたき  
 三井の景  
 さきさきかきさきのたき

右八景八宗房の所の秋の景

九のときさきさき  
 深川のさきさきに結すき安きさきさきの











